

去年、私は古本市の支援先の一つである東南アジア文化支援プロジェクト、通称 CAPSEA へその年の古本市の売上金を渡すために代表のペン＝セタリンさんの経営されているレストランへ行きました。そこで、セタリンさんから一時間程 CAPSEA についてお話をうかがいました。

はじめにお話しして下さったことは、CAPSEA が出版しているカンボジアの子供たちのための教科書についてです。先ほども説明があったように CAPSEA では図書館や小学校を造るだけでなく本も出版しており、この教科書もまたその内の一冊となっています。教科書を開くと全頁がカラー刷りで、イラストも多く載せられていて、とても見やすいレイアウトとなっています。私はクメール語は読めませんが、このイラストのお蔭でパラパラとめくるだけでも教科書の内容をなんとなく理解することができました。教科書には国語の読み物としてカンボジア風の「おむすびころりん」が載っていました。そのイラストはカンボジア風へと変えられていて、日本昔話ではまず見かないものが描かれています。たとえば、道端にバナナの木やヤシの木が植わっていたり、おじいさんとおばあさんが椅子に座ってテーブルで食事をしていたりなどです。日本昔話をわざわざカンボジア風になるように変えて翻訳し、カラー印刷で読みやすくするなど工夫しているこの教科書を見て私はセタリンさんがいかに、カンボジアの子供たちがより楽しく勉強できるように努めているかということを感じました。ちなみに、これがその教科書ですが、この教科書はメディアセンターに展示していますので興味のある方は是非手に取ってみてください。

次にお話しして下さったことは、ある一人の女の子についてでした。その女の子は CAPSEA の学校へ通っているごく普通の女の子です。しかし彼女は本来ならば学校へ通うことができなかつたのです。それは、彼女が家の中で労働力とみなされていたために、学校へ行くことで重要な労働時間を減らされては困るといった両親の考えがあったからです。彼女の両親が彼ら自身の子供を学校へ行かせる必要がないと考えている理由は、1970 年から 1991 年まで 21 年間続いた内戦並びに独裁政治の影響でした。彼女の両親は学校へ通えず、学校教育がいかに大切かということが解っていなかつたのです。セタリンさんは、どうしても彼女を学校へ通わせたかつたので、彼女の両親に、彼女が学校へ行かずに働いていたら得られるであろう収入金額を渡すことを条件に彼女を学校へ通わせることに成功したそうです。

この話を聞き、親が子供に教育を受けさせたいという意思を持ち合わせていないのはカンボジアの教育制度が整っていないからではないかと感じ、気になって調べてみました。カンボジアでは日本と同じ 6・3・3 制の義務教育制度が成立しています。しかし、ユネスコの統計による識字率を調べてみると、70%と低い数値であることがわかりました。この識字率が低い原因は、学校制度は成り立っていても、内戦による多数の死者のために先生が足りておらず学校が機能していないことがあげられます。

私は、義務教育の範囲内である中学校までだけではなく、高校までも通わせてもらい、さらに行きたい大学へ進学するために予備校も通わせてもらっています。私はそれが当たり前だと思って生活しています。しかしそれは、少なくともカンボジアの子供たちからすれば恵まれている環境であることを強く感じました。

図書委員会では、カンボジアだけではなくネパールの子供たちのために図書館が造られるよう、また大震災やこの度の大雨による被害などで通常運営ができていない学校図書館が無事に復興できるよう支援をするために、古本市を開催します。みなさんが古本市に参加することで学びたいと思う人が私たちと同様に何のしがらみにも捕らわれず思う存分学ぶことができます。みなさんがこのことを意識して古本市に参加していただけたら、幸いに思います。